

---

# 訃報

夏見里

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

訃報

### 【Nコード】

N9224D

### 【作者名】

夏見里

### 【あらすじ】

大人たちは笑うけど、中学生・高校生の恋だつて、「本気」です。嬉しいこと、悲しいことを乗り越えて、大人になっていく少女の姿を描きます。

## HUHO（前書き）

人の死を初めて身近に感じたのはいつですか？それが、本気で好きになった人だったら？

## H U H O

携帯に懐かしい名前を着信メールがあった。  
開くと、それは訃報だったー。

もう10年前になる。

中学3年生、秋。寒くなることに受験モードのピリピリ感が増す。  
私は、いささかその雰囲気についていけず、気疲れしていた。

授業中、ふと校庭を見下ろす。

隣のクラスは体育でサッカーらしい。

塾に行くと、3年生になると風邪防止や受験科目の授業優先という理由で体育の時間は無くなる学校も多いらしい。なのに、うちの学校は律儀に体育もやらせている。案外、その貴重な体を動かす時間がストレス解消になるらしく、今までに無く楽しく積極的に授業に参加していたりする。

その中に、ひときわ小柄で、でもすばしっこく動く子がいる。ボールのある所に必ずいる男の子。

ヒロだ。広岡信也。

私の目はいつだって、彼を見つけてしまうのだ。

いつだったろう、彼を好きになったのは。

1年生の時、同じクラスになった。

160センチに満たないくらいの小柄で、地毛なのに茶色が多い髪の色。クリっとした目が小さい顔に目立つ。本人いたって健康児なのに、色が白くて細身なのが悩ましい。

あんまりキレイな顔をしているから、他の男子から「ヒロ子」とひやかされることも多かった。けれど、幼稚な男子と比べ、大人び

ている女子は、とつくに先見の目があったというか、密かに人気があったのは確かだ。

かくいう私もその一人。初めは「へえ、この子、人気があるんだあ」くらいに見ていたと思う。ただ一度、クラスの用事か何かで話した時に、他の男子に無く爽やかで「にこっ」と笑う顔にズキユンとやられた。「ああ、負けた」と思ったのを覚えている。

今思えば、他の男子は思春期に入って、女子との会話を照れくさがって、ぶっきらぼうになっていた。ヒロは、まだ思春期に入っていなかったのか、元々人懐っこいタイプだったのか、分からないけど、その違いもあったと思う。

3年で違うクラスになってしまったけど、2年までは同じクラスだった。ヒロを中心とするクラスの雰囲気良く、仲が良いクラスだった。そうなると先生もやりやすいらしく、他のクラスより授業も進むし、ちよつと時間が余って自習という時に、先生にさりげなく聞けたりするから、いつも他のクラスより平均点良かった。

ヒロは、学校の部活には入らずに、町の少年サッカーチームに入っていた。それが、また学校以外の世界を持っているというだけで、格好よく思えた。

高校もサッカー推薦で行けると言われたが、ヒロは「自分はそこまでサッカーは上手くない」といい、学区で一番レベルの高い公立高校を目指した。

今まではサッカーをやっていたから塾に行けなかった、と3年生から塾に行き始めた。どっかの塾の宣伝みたいに、みるみる成績は上がり、元々定期試験では、常に1割以内の順位をキープしていたが、この間の中間試験では5番になっていた。

3年でクラスが離れると、本当に寂しかった。  
私と3年間同じクラスのカナは

「ヒロがいないクラスってつまないねー」

と言った。そんな彼女も私がヒロを好きなことは知らない。彼女は、一番仲良しの友達だけど、人気のある彼を私が好きだなんてなかなか言えなかったのだ。彼女もミーハー根性なのか、本心なのかは分からないけど、ヒロを気に入っていたことは確かだ。

何かとヒロの様子を伝えてくる。その度に私は「へえ、そう?」だなんて、興味が無い顔を装わなければならなかった。

そんな彼女の伝えてくる情報の中には、聞きたくないものもあったわけで…。

## 秋から冬へ。

ある日の学校からの帰り道。

家も近いカナとは、ほとんど毎日一緒に帰っている。社交的なカナは、なかなかの情報通で、いつも色んな話を聞かせてくれる。誰と誰が付き合いだしたかの、誰はこの高校を狙ってるらしいだの。ところが、今日に限ってどうにも大人しい。

試験の結果が、悪かったのか。体調が悪いのか。

「何、カナ、今日大人しくない？」

「そう？そんなことないよ？」

「分かりやすすぎるよ…。」

しばらくの沈黙の後、カナが口を開いた。

「んー…あのさ？」

「うん？」

「聞きたくないかもしれないんだけど。」

「聞きたい、聞きたい」

「いや、そういう話でもないんだけど。」

どうも今日のカナは歯切れが悪い。そんなに私が嫌がる話？誰か私の悪口でも言ってたか。

「うん、大丈夫だから言ってみて？」

「言うよ？あのね、ヒロね、キョーコと付き合いんだって。」

「へえ。」

「で、何でそんなに、歯切れが悪いの？」

「だってユウ、ヒロのこと好きなんじゃ…。」

「なんで？そんなこと言ったことないじゃん。」

「だって、いつもヒロのこと見てるし…。」

「そりゃあ、あれだけ目立ってればねえ。…って、そんなこと気にしてるってことは、カナこそヒロのこと…。」

「ユウが、ヒロのこと好きだと思ってたから言えなかったんだけど

…。」

「言つてよー。」

そう言つて、笑う私。

その後、カナの失恋話に付き合う私。

しまった…。10分前の私を返してくれ…。

カナからヒロが付き合い始めた話を聞いた瞬間は、カナの話の「ヒロ」は自分の好きな「ヒロ」ではないような気がしていた。だから、すぐに「へえ。」と返事ができた。実際、その話の「ヒロ」を認識したのは、カナと別れて一人で家に向かう時だった。そして、本当に「ヒロ」が付き合いだしたと認識したのは、彼らが一緒に帰るのを目撃した時だった。

照れくさそうに、ズボンのポケットに手をつ込んで歩く。一回り小柄な彼女が、彼の少し後を追う。

本当に付き合ってるんだ…。

こう目の前にさせられては、信じざるを得ない。「心に穴が空く」とよく言うけれど、「心にバズーカ砲」だ。でっかい穴に、風邪がびゅうびゅう吹きすさぶ。

季節は、秋から冬になろうとしていた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9224d/>

---

訃報

2010年10月8日12時08分発行